

卷 頭 言

木簡の出土が全国各地の多種多様な遺跡に、また広がった。今年も、発掘調査中木簡を発見し、水洗いから保管処理まで、周到・迅速な対応に尽瘁した調査関係者は、決して少なくなかったであろう。貧しい経験からいえば、とくに初めて木簡と遭遇した地方の遺跡では、どのように釈読依頼をするか、いつ赤外線テレビに映せるか、大いに気がもめてしまう。発掘調査の期間内に、遺構の性格や年代の判定に役立てたいと苦慮もする。

目ぼしい新出木簡の一部は、木簡学会研究集会の会場に、早速公開、展示されることがある。会員にとって、願っても叶わぬ僥倖であり、恵沢を有難いと思う。ところが、その会員の増加傾向が続ぎ、発足時の三倍、三百人を突破する情勢となってきた。近年、創立以来借用の会場に、もう座席を追加できる余裕はなく、展示の木簡に限りなく目を近づけて観察するのさえ、憚り多いと感ずるのは、ひとり私だけであろうか。当学会は、木簡情報の収集と木簡の実物に即した基礎研究、木簡を資料として利用する特殊研究を共通目標に掲げ、学界における独自の地位を築いてきた。それだけに会員増が、会活動発展のあらたな阻害要因になりつつあるとする意見には、十分耳を傾けねばならない。

もっとも、だから直ちに入会制限を強め、総会員枠を設けようとするまえに、会運営の実態にも目が向けられてよい。長屋王邸跡の一つの溝から出土した木簡が、いわゆる一括史料とされ、それによって、荷札をつけた貢進物が直接邸内家令所宛に送られた公算は、すこぶる大きくなったといえよう。木簡研究の一断面にすぎぬが、木簡を、その廃棄・出土事情や遺構・伴出遺物と結びつけ、それらの一体的な考察が不可欠であること、今更多言を要しない。それにもかかわらず、依然発掘担当者

との連携を一方的に呼びかけるのは、いかにも均衡を失っているようにみえる。会員の構成や参加の仕方自体、討議すべき題目なのである。

しかも、会員数の抑制案に対し、他方で反対説がある。会員の増加が調査・研究活動の強化につながるのに反し、入会制限はかえって会活性化の障害となる。会の性格はすでに変わっており、会場や展示方法にも、代案・工夫の余地はあるという。本学会は、相異なる学問領域の研究者がそれぞれ役割を分担し、相互に批判しあいながら、全体として「木簡の究明」を標榜する協業の組織である。入会した各分野の個々人が、会に対する寄与と会から受け取る得分の双方を按配して、会組織は維持され、あるいは変容するものであろう。両者のズレの増大が、現下の会員増加問題の根底にあるとみるのである。「入会問題」は、単に会員数のレベルにのみとどまっていない。やや過大に表現すると、会の存立にかかわる組織原理・成員構成・活動方針の問題といえるのであり、その再点検から、議論をおこすべきだと思うのは、このような理解のために他ならない。

その場合、関連論議の対象として、私見にすぎないが、次の諸点を列記しておこう。まず研究集会は、個別発表のほか、テーマ報告・シンポジウム方式・小集会などと組み合わせ、また展示に写真・見取図の活用を図る。調査機関をはじめ関係諸団体（外国を含む）との組織的、恒常的な共同関係を確立し、研究の総合・学際化を一層推進する。さらに委員会の構成を機能化し、責任分担を明確にする。会誌の編集・刊行体制も、より整備する必要があるものか。なかでも焦眉の要目は、大学院学生的位置づけである。長期的にみて若手研究者の養成や会リフレッシュのためにも、この世代に実物を見る「体験学習」の機会をつくることはできないであろうか。

委員会是一九九一年度の総会に、新規入会の二年間凍結という異常措置を提案、了承された。木簡学会の今後のさらなる発展・充実に向けて、広く会員各位が積極的に議論に参加されることを、切望する。